


 書評

澁谷智子 編著

女って大変。

働くことと生きることのワークライフバランス考

永田貴子

女性の触法患者さんの葛藤から見えるもの

私が勤務する司法病棟は、精神障害のために重大な他害行為を起こした人の治療と、安全な社会復帰を担う場所である。「幻聴や妄想がつかくて、我慢の限界を超えて(触法行為を)やってしまった」という人が多いなか、「私がいなくなってしまうたら、残される家族が可愛そうだと思って」と、妄想から憐憫の情に至って、子どもや配偶者を傷つけてしまった人がある。実は、後者のようなケースは、時代や国を超えて女性(特に産後のうつ病など)に多いことがわかっている。女性に期待される子育て、介護、家事などから生じる葛藤は、妄想の世界にまで大きな影響を及ぼす深いテーマなのだ。

さて、本書——情熱的な真っ赤な地に、大きな白い字で「女って大変。」と書かれた表紙を見たとき、思わず「そうそう！ 男性のみなさんとは違って大変なのよね」と思った。しかし、本書は男性と真正面から対峙するような単純な構図の本ではないのがよい。

この本には、研究者、看護師、医師、そして働く女性の先達としての神谷恵美子を含む、十人の女性が登場する。家事の援助に感謝や申し訳なさ、理不尽さなど複雑な思いを持ちながらも第一線で研究を続ける方。生死をさまようような体験を機に、人生と母親の役割をドライにとらえ直した方。結婚、離婚、子どもの不登校などさまざまな体験が、資格の取得や精神科看護領域の仕事に立派に活かした方。家族の看護・介護と仕事としての看護業務の両立の葛藤をじっくり見つめた方もいれば、そこから「弾けて」新たな生き方の価値観をみつけた方もいる。皆さん、書いているうちに思いが溢れて、当初の予定の分量を大きく上回ったとうかがった。それだけに、笑いあり涙あり、読んだ後は十編の珠玉の映画

を見た気分だった(余談だが、私は、途中数ページある四コマ漫画で、母に「ごはんよ」と言われただけでキーッと怒っている思春期の娘の絵がリアルで大好きだ)。

妻や母や娘として、さらに一職業人としてこうありたいという理想と、目の前の出来事に翻弄され時間を費やさざるを得ない現実との間に、「はぁ」とため息を漏らしてしまった経験は誰にもあるに違いない。私も、治療者として冒頭の患者さんたちに向き合いながら、老親を持つ一人娘として、いまだ見ぬ結婚や出産の可能性をどんな風に自分に位置づけると一番しっくり来るのか模索している。そんなとき、常によりよい方向を求めて努力してきた本書の十人の物語は、とても心強く感じられる。

昔に比べ、家族や価値観の多様なあり方が受容されるようになった分、人生の責任は個人にあると思われる面も大きくなった。「あなたが選んだ道でしょ」と言われれば、自己責任の名の下に女性の大変さを語ることは失われてしまいがちだ。だからこそ、ウーマンリブ運動の起こった 70 年、80 年代を越えた今、現代ならではの女性の大変さ、私の人生を自分のことばで語ってみよう、というのが本書である。そこには、立場を超えてうなずける生き生きとしたドラマが存在している。

実生活で女性としてことばにできない思いを抱えている方、女性職場で働く方、女性をまとめる管理者の方など、さまざまな立場の方に読んでいただき、それぞれに感じたところを伝え合っていたいただけたら幸いである。

(国立精神・神経医療研究センター病院精神科)

●四六版 266 頁 2011 定価 1,890 円(本体 1,800 円+税) 医学書院